大学出版

'97 冬

No.32

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会

大学出版
32号

Winter · 1997

読書の周辺　独創性について ―――― 浪平　博人　1

読書の周辺　大衆文化現象をどうとらえるか ―――― 権田　萬治　6
――米大学のミステリー研究――

第15回日韓大学出版部合同セミナー
大学出版人としての人間的共感を礎に ―――― 笹岡　五郎　11

第1回日韓大学出版部協会共同図書展 ―――― 鎌田　靖彦　14

出版社のインターネット利用状況 ―――― 植村　八潮　17

歩く・見る・聞く――知のネットワーク　6 ―――― 19

大学出版部ニュース ―――― 21

新刊案内 '96・10～'96・12 ―――― 29

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛

■読書の周辺

独創性について

浪平博人

最近は独創性の大切さについて耳にすることが多い。これは、時代の変化の速さが非常に増したためであろう。かつて変化が緩やかであった時代では、昔の経験が長いあいだ役に立つので、年功に基づく社会構成がそれなりに合理性を持っていた。しかしながら、社会の枠組みすら変わっていく時代においては、今を切り開くために、経験よりも過去に囚われない物の見方—すなわち独創性—の方が重要となっていく。以下に、問題解決に際しての独創性について多少まとめたので、それについて述べてみよう。

時代の曲がり角で生じる問題の解決には、従来の方法の延長で〝もっとうまくやる〟という方向ではうまく行かないものが多くなる。それらは、従来の発想からでは処置に困るものであり、混沌としたものに映る。このような問題に対して、それを打開する、なるべく再現性のある発想法の必要性を痛感し、数年前にその模索を始めた。

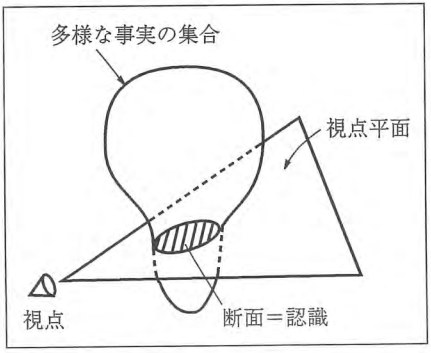
まず、発想の大変ユニークな人の逸話を調べてみた。ある久留米の足袋屋は、商売で上京したとき、東京では電車賃が乗った区間によらず一定であることにハッとした。そして、それまで文数毎に異なっていた値段を統一することにより経理処理を簡便化し、余った人数を販売に回すということを思い付いた。これは、ブリヂストンの創始者の石橋正二郎翁のことである。要点は、電車に乗っている人は当時でも毎日何万人もいたであろうに、なぜ翁だけに新しいことへのヒントになったかということである。

これを糸口として、人間の認識の特徴について考えてみた。人は物事を客観的に—誰もが同じように—理解するのであろうか。フランスの科学的犯罪捜査法を教える学校の教室には、〝目はそれが捜し求めているもの以外は見ることができない〟という標語が掲げられているという。キリギリスのメスはそのオスの鳴き声のみが聞こえるようになっている。すなわち、動物の行う認識とはそもそも目的的なのであり、人もまた自分の興味のあるものだけを見ているのである。しかも、物事を自分の考えに沿って従来の見解を強めるように都合よく理解するのである。これは、次の

ような例を考えればよく分かる。

いま、90人（Aグループ）と10人（Bグループ）からなる集団があるとし、互いに偏見を持っているとする。大勢派Aの考えでは、少数派Bは怪しい連中でその50％は悪人で、それにひきかえ自分たちは清く正しく悪人は3％くらいしかいないと思っているとする。A、Bが連れ立った旅先で誰かのお金がなくなるという事件が起きたとき、Aグループでは次のように考える。集団の中の悪い連中が行ったとすれば、Aの90人の3％（＝2・7人）かBの10人の50％（＝5人）であり、犯人がBに属する割合は5／7・7である。これは、最初AがBに抱いていた悪感情50％を上回るものであり、この事件により当初の感情を更に強めるものとなっている。一方、少数派Bは、大勢派Aはいつも嵩にかかって自分たちをいじめ、その30％は悪人であり、自分たちは10％くらいがいけないものと思っているとしよう。このとき少数派Bの事件に対する見解は、犯人はAの90人の30％（＝27人）かBの10人の10％（＝1人）の中におり、犯人がAに属する割合は27／28となる。この見解に従えば、犯人はAであることは、ほとんど確信に近いものであり、BはAに対する感情を更に悪化させる。すなわち、一つの事柄でも見解に従って全く異なることを支持する証拠になる。

以上のような考察を経て、人の認識するものとは、多様な事実の集合を自分の視点平面で切った断面と考えるとよく分かることに気が付いた。その視点の形成過程を考えてみると、小さな部分は個々の経験に基づき異なるが、大枠では社会共有の文化を背景とする物の見方に大きく方向づけられている。そして、起きる事実はその共有する見方に沿って解釈され、その見方をますます強めていくのである。



さて、問題に対して独創的に対処するための方法論を考えるのであるが、問題の種類に2つありそうである。1つは、問題の輪郭が大体理解できる場合である。この場合の方法論は、見方を変えることである。見方とは、多くの思い込みの上に成り立っている。したがって、これに対する具体的な方法論としては、問題解決の手順をいくつかのステップに分け、その各々で暗黙のうちに入っている思い込みを強制的に排除する再現性のある方法を考えよう。

問題のもう1つの種類は、問題自体が混沌としている場合である。物事はある視点に立って初めて1つの解釈ができる。問題が混沌としているのは、それを見る視点を失っていると考えよう。そうすると、この場合の具体的な方法

論は、適切な視点を提供することである。また、これに関連して、ハッと思い付くメカニズムについても考えてみた。

第1の場合の〝問題の輪郭が理解できるとき〟は、問題解決の手順を　＊問題を設定する段階　＊構成要素を選ぶ段階　＊要素間の関連（構造）を考える段階　＊改善する段階　の4つに分けて、その各々でガイドラインに沿って思い込みをチェックする。考えた内容の全体を詳しく述べる紙数の余裕がないが、たとえば、〝問題を設定する段階〟では、次のような項目を強制的にチェックすることが考えられる。

▼問題というものは階層をなすが、選ばれた問題は適切なレベルのものか。いま提示された問題は上位の問題の解決方法の1つとして提示されているのかもしれない。あるいは、もっと下位の問題に絞った方がよいのかもしれない。

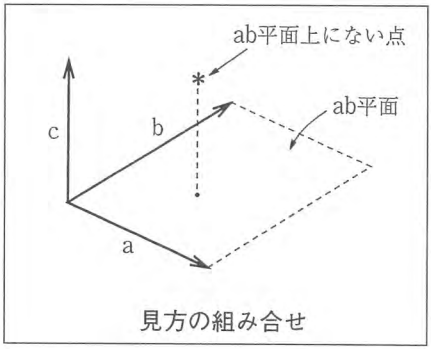
▼多角的に問題を解釈するために、解決チームは異なった分野の人間で構成されているか。aという見方とbという見方の者が集まって協力すれば、ab平面上のことは理解できる。しかしこの平面上以外のことは、cというabとは別の見方をするものが加わる必要がある。しかし、cはa、bから見れば自分達と共通点のないもの、すなわち異端なのである。すなわち、異端を無意識のうちに排除していないか気を付ける必要がある。アイデアは、異種との出会いから生じるものである。

▼尺度は正しいか。問題の改善の度合いを何で測るかの尺度の選定は、問題の質の根幹にも関わるものである。

〝構成要素を選ぶ段階〟での思い込みの排除のためには、いくつか考えられるが、最も大切なものは〝制御不可〟の思い込みである。今までの経験から〝それはできない〟と思い込むことである。専門的になればなるほどこの傾向が強い。〝変えられない〟として、その要素を変革することなどはじめから頭に浮かばない事柄の内容を冷静に分析してみると、次のようである。

＊内心変えたくない　＊変える実行力がない　＊利害がない　＊制度・習慣

たとえば、ケーキの製造工場では製品が永く置けるものではないので、製造数は需要にミートする必要があり、予測の精度を上げようと努力していた。このとき暗黙のうちに需要は制御できないと思い込んでいた。しかし実際は、結婚式場などの大口需要では、その需要数はかなり前から分かっているのである。利害がないから知らせないのである。そこで、前もって注文すれば割り引くようにすることにより、



見方の組み合せ

かなりのものが確定需要となったとのことである。

〝要素間の関連（構造）を考える段階〟や、〝原因を突き止めてそれを改善する段階〟にも、無意識に入り込む思い込みをチェックする工夫を凝らすことにより、多くの選択肢が拓けてくる。そして、これが相乗的に利いて、全体としては大変創造的な解決に至ることができるものと考える。

次に問題自体が混沌としている場合について考えてみる。まず、ハッと思い付くメカニズムについて考えてみよう。いわゆる〝閃き〟の例は、アルキメデスの浮力の発見、ケクレのベンゼン環あるいはポアンカレの数学上の難問の解決等が有名であるが、このような突然解答を思い付く出来事に共通項を探すと、次の3つが浮かび上がってくる。第1に、意識上に強烈に刷り込まれた問題意識がある。第2に、リラックスした状態にあることである。これは、弛緩した無意識状態では、アイデアの自由な組み合わせが行われやすいからである。第3に、小さなことにもよく感動する性格であることがあげられる。感動とは、意識の枠組みが緩むことなので、新しいことに気がつく可能性が高いものと推察できる。流れ星に願いをかけると叶うというのは、乙女のロマンチックな作り話ではない。実際に流れ星が見える時間を計ってみると、長くても2〜3秒である。この短い間に即座に言える望みは、大変意識に凝縮されたものであり、どのような機会も自分の望みに結び付ける用意ができている。そのような望みはかなえられやすいのである。

さて、閃きのメカニズムを追ってみたが、最後はどうしても追跡できない飛躍がある。したがって、混沌とした問題に対しては、次善の策で満足せねばならない。ここで、問題が混沌として見えるのは、問題自体が混沌としているのではなく、それを見る視点を失っているとする立場に立つ。そして、問題への適切な視点を探す具体的な方法論を考えた。

いま、視点について考えるとき、それが有効である適用範囲は広いものから局所的なものまで種種ありえるであろう。適用範囲が大変広い原理的視点となり得るようなものに着目するとき、その数はあまり多くないと考えられる。それは交響曲において多様な調べがあるが、主旋律はわずかであることに喩えられる。そこで混沌とした問題への次善の策としては、なるべく多くの広い範囲に適用できる原理的な視点を列挙し、その外挿を試行錯誤的に試みることとした。すなわち、これら原理的視点に沿って強制的に問題を眺め直し、その中で問題が一番秩序高く見える視点を採用し、これを逐次改良するのである。

原理的視点とは、一見関連なさそうな多くの現象を、その背後で統一的に結び付ける見方を指す。これまでいくつかの原理的な視点を調べ上げたが、一例として集中という原理的視点について述べてみよう。

――原理的視点・集中――

竹刀で頭をたたかれてもたいした怪我はしない。しかし、

真剣でたたかれると死んでしまう。理由は、竹刀の場合は頭に広い面積で当たりかつ曲がってしまうのに対して、真剣では力が刃の小さな面積に集中するからである。

真剣を振るとき大きな力が出るわけではない。同じ力がどれだけの面積の上に集中するかの度合いの違いなのである。すなわち、現実的な能力とは集中力のことでもある。

人の持つ潜在的な力はそう変わるものではない。現在世界一の一〇〇メートル走者は九・八秒で走るが、その倍の時間をかけてよいのなら筆者でも走れる。世界一の走者でも、筆者のわずか二倍の速さである。すなわち、人がもっている力は大して違わないのである。人の能力とは、潜在的な力の集中の産物であり、大切なことは、いつ、何に集中するかの選択である。筆者は、若者にいつもこの事を強調している。

さて、戦いにおいては、集中は大原則である。ランチェスターは戦史を調べて、戦いの様相が鉄砲が使用される前と後ではまったく異なることを見出した。昔の刀による戦争では、戦いは本質的に一対一で行われる。双方の強さが同程度とすると、戦闘により大体同数ずつ減っていく。しかし、銃の発明以後、戦いははるか離れた敵に弾を撃つという間接的なものになった。したがって、多い方は少ない方を多く倒し、ますますバランスが崩れていく。すなわち、兵力を集中する方が非常に有利になってくる。有利さの度合いは兵力の二乗で利いてくるので、これをランチェスターの二乗則と呼んでいる。

しかし、これは人数の多い方がよいということを主張しているのではない。正しくは、当面の戦闘に有効に参画できる人数の多い方が、その人数の二乗比で有利であることをいっているのである。いくら人数がいても、当面の戦闘に寄与しなければ無駄なのである。

この観点から組織を見れば、当面の問題に組織の要員が的確に寄与できる度合いの大きい方が、集中の利得を受けることになる。これを可能ならしめる組織は、次の要件を満たしたものであろう。

(1) 問題の所在が公開されていること

(2) 組織内のすべての人が興味があればアクセスできること

(3) 必要なら再組織化が迅速に行われること

変化の激しい時代にあっては、以上のような要件を満たすアメーバのような組織が適合すると考えられる。

以下、紙数の関係で省くが、このような原理的視点となり得るものをできるだけ多く集めることにより、柔軟な発想の出発点としての有効性を実感している。

さて、今まさに社会の変動に伴って教育改革の論議が盛んであるが、キーワードの一つは創造性の育成であろう。これに焦点を当てた実効性のある教育体制を早く作り上げた教育機関が、明日の勝者となると思うがいかがなものか。

(産能短期大学教授)

■読書の周辺

大衆文化現象をどうとらえるか

――米大学のミステリー研究――

権田萬治

記号論の世界的権威で国際記号学会の会長を務めるウンベルト・エーコは、本職はボローニャ大学の教授だが、むしろ異色のミステリー『薔薇の名前』の著者として世界中にその名を知られている。

この作品は映画化されたこともあって、九〇年の時点で一千万部を超えるという大ベストセラーになった。小説を読まない人でも映画は見た人という方も多いと思う。

筒井康隆が『文学部唯野教授』で小説を書く大学教員の生態をシニックに描いて話題を呼んだことがあるが、実は大学で教鞭を取るかたわら推理小説を書いている人が海外では意外に多いのである。

古典的な名作『野獣死すべし』の作者のニコラス・ブレイクは、詩人としても有名で、オックスフォード大学の詩学教授を務めたことがある。

『ジェームズ・ジョイス殺人事件』の著者アマンダ・クロスは、確か以前コロンビア大学の英文学の教授だった。

私立探偵スペンサー・シリーズで日本でも人気のあるロバート・パーカーは、ノースイースタン大学の教授である。

大体、ミステリーというのは、好きで読んでいるうちに、自分でも書いて見ようと思いつくのが普通なので、こういうふうに大学教授のミステリー作家がいるということは、大学教員にミステリー・ファンが多いということをも意味しているように思う。

事実、欧米に限らず私の周囲の先生方にも隠れファンが何人か居られるのである。

アカデミックな研究を続けていると息苦しくなり、ちょっと息抜きに逃避文学であるミステリーを手にするということが多いのかも知れない。

が、このように知性集団と思われる大学教員の間にさえかなりの愛好者がいるにもかかわらず、ミステリーを含め、一般に大衆文学というものは、これまでほとんどまともな研究対象になってこなかった。

優れたフランス文学者だった桑原武夫は、名著『文学入門』（一九五〇年）で、「大衆文学の流行ということは、

（中略）こんにち世界一般の現象なのである。ところが従来の美学書ないし文学理論書の多くは、この事実を全く無視するか、あるいは罵倒ないし愁嘆するのみで、要するに問題を回避している」と述べている。

恐らくそういう立場に立ってのことと思うが、桑原教授をはじめ京大人文科学研究所の多田道太郎氏ら当時気鋭の学者が柔軟な立場から日本の文学、文化をとらえ直そうと大衆文学、大衆文化にも目を向けた。

同じような傾向は、南博の『日本人の心理』にも見られ、後に氏が主宰する社会心理研究所の石川弘義（現成城大学教授）らにも受け継がれ、数年前には石川氏らの編集により、『大衆文化事典』（弘文堂）が出版されている。

さらに、鶴見俊輔は『思想の科学』研究会の活動と並行して、『限界芸術論』（一九六七年）を発表した。

「読書の周辺」ということなので、話を軟らかくするために、大衆文化研究の流れとそこに潜む問題点については、津金沢聡広の論文「戦後日本の『大衆芸術・娯楽』研究の動向」や、吉見俊哉の『メディア時代の文化社会学』（一九九四年）など優れた論考に譲り、ここでは、ミステリーに限っての文学的観点からの具体的な研究にのみ触れることにしたい。

私の大学での専門はマスコミ論で、直接は関係ないが、長い間個人的に関心を抱いていた一人として見ると、欧米に比べ日本の研究活動はまことに貧弱である。

アメリカでははるか以前から、ミステリーやSFを扱う講座が大学にいくつも設けられているが、日本では皆無といっていい状況である。

オハイオ州ボーリング・グリーン大学には一九六七年に大衆文化研究センターが設置され、推理小説をはじめとする大衆文学、流行歌、映画などの大衆文化を総合的に研究しているが、なかでもミステリーの研究が一番活発である。

研究センターは四人の専門研究員、十人の準研究員、その他六人の職員で運営されているといわれ、季刊の機関誌Journal of Popular Cultureを発行しているほか、数万冊の専門書と数万枚のレコード、さらにはCDなどを所蔵しているという。

特に注目されるのは、同大学の出版活動である。

翻訳出版されて話題になったフランシス・ネヴィンズ・ジュニアのエラリー・クイーン論『王者の血統』をはじめ毎年数多くのミステリーの研究評論を刊行している。

ただし、中身は率直にいって玉石混淆で必ずしも研究水準は高いとはいえない。

この大学の出版局に限らず、アメリカの大学出版局では、ミステリー関係の研究評論をいろいろ出しているようである。

ちょっと蔵書を調べて見たところ、例えばWilliam Ruehlmannの Saint with Gun（一九七四年）はニューヨーク大学出版局、Patricia HartのThe Spanish Sleuth（八

七年）はアソシエーテッド大学出版局、John G. Cawelti & Bruce A. Rosenberg 共著の The Spy Story（同）は、シカゴ大学出版局が出している。

このほか、カリフォルニア大学サンディエゴ分校では、一九七六年に十七人の作家、評論家の評論を集めた評論集 The Mystery Story を編集、刊行している。

また、アメリカの大学の図書館ではミステリー作家の原稿や資料を所蔵する例が多い。

例えば、エラリー・クイーンやダシール・ハメットの原稿コレクションはテキサス大学人文科学研究センター、レイモンド・チャンドラーのものは、カリフォルニア大学研究図書館付属の特別蔵書部、ロス・マクドナルドのものは同大学図書館といった具合である。

大衆文化研究で一番困るのは、研究対象が日々消費され、失われることである。確かに、ミステリー一つを取っても、その中で文学的に論じるに足る価値のものは、わずかに一、二パーセントに過ぎないと思う。しかし、なかにはハメットやチャンドラーやロス・マクドナルドのように不滅の輝きを持つものもあるし、全体として下らないように思えるものでも文化現象として見れば、例えば戦後のカストリ雑誌のように研究対象としての価値があるものもあるはずである。

これまで日本では、大宅文庫などを除くと、そういう資料館がほとんど皆無だったため、貴重な資料のほとんどが散逸し、好事家の間で、研究者には手の届かない高い値段で取引されているのが現状である。

ところが、最近国際的にも、こういう現状が見直されつつあるように思う。

九五年十月、パリにミステリー専門図書館がオープンしたのもそういう動きの表れといえるだろう。

この図書館は、La Bibliothèque des littératures policières といい、地下鉄十号線のカルディナル・ルモワーヌ駅を降りて、すぐの消防署を右に曲がった所のビルの一階にある。

私は最近、ヨーロッパ旅行の帰りにこの図書館を訪ね、日本人では私が初めてですかと聞いたところ、驚いたことに、もう先客がいて日本人としては五人目ということだった。

入って左側の部屋には、英仏などのミステリー研究誌がマガジンラックにぎっしり並び、世界で最も優れたミステリー研究誌として知られているアメリカのアームチェア・ディテクティヴ誌が製本されて創刊号からそろえられている。

右側が閲覧室で、こちらにはミステリーの研究評論を中心にした本が並んでいる。この一階部分はレファレンスつまり研究者用の参考文献室ですべて開架式。約三千五百冊の本を手に取って読めるので便利である。ミステリーの本質論や作家論、歴史、などのほか、テレビのシリーズものや出演俳優などのリスト、さらに犯罪組織、警察制度、犯

罪学などの文献も網羅されている。

珍しい小説のコレクションは三万冊にのぼるが、これは二階の書庫に所蔵され、受け付けに申し込んで閲覧できる仕組みになっているようである。

恐らく世界でも初めてのこのミステリーの専門図書館は、実はパリの市営である。もともとフランス国立図書館に献本された九千冊のミステリーのほか、同図書館の分館であるアルスナル図書館（芸術関係資料を収集）の資料が一九八四年にパリ市に移管され、最初は市の図書館の特別コレクションの扱いになっていたが、昨年十月に独立した専門図書館として本格的にオープンしたということである。

こぢんまりとした図書館だが、イベントホールもあって、各種のイベントをしょっちゅう催しており、ホームズに関するものをやった時は、世界各国から沢山人が来ましたという話だった。

実は日本でも、光文社が財団法人光文シェラザード文化振興財団を設立、九七年十月を目標に東京池袋にミステリー文学資料館を開館する計画で、目下準備を進めている。

ミステリーの分野では率直にいって日本では、これまで、本格的な研究評論は乏しかったが、このような形で、ようやく、実証的研究の基礎が敷かれることになったわけである。

しかし、ミステリーをはじめとする文字文化だけでなく、これからのマルチメディア社会における大衆文化研究は、マンガやゲームなどますます多彩な広がりを持つことが予想される。

児島和人、橋元良明共編『変わるメディアと社会生活』（九六年）は、この点について次のように指摘している。

「来たるべきマルチメディアが、新たな『公共圏』の形成、知の領域の幅広い拡張をもたらす可能性は認めねばならないが、『経済の時代』そのものが清算されないどころか、さらに『深化』の度を強め、消費文化がわたしたちの全生活領域を覆っている今日、ビデオ・オン・デマンド・サービスであれ、オンラインゲームであれ、CD-ROMソフトであれ、マルチメディアビジネスとして追求されているサービスは現実にはさらにエンターテインメント領域へと傾斜するかたちで構想されており、知の多元的拡張は抑止される傾向にある」。

マルチメディア社会のバラ色の幻想ばかりを語るものが多い中で、私はこのややペシミスティックな見取り図に基本的に賛成する者である。

ここでいう〈エンターテインメント領域〉とは、大衆文化と言い換えてもさして誤りではないと思うが、とするならば、批判的な意味における大衆文化研究は今後さらに一段と重要性を増すのではないだろうか。

率直にいって、文字文化にどっぷり浸かって生きて来た私には、マンガやゲームなどの文化的な意味が十分に理解できるとはいいにくい面があるが、いわゆるM事件によっ

て、象徴的に浮かび上がったオタク的現象が、マルチメディア社会の到来とともに、部分的には一層深まるに違いないということだけは予感できる。

また、ヴァーチャル・リアリティの世界の深化は、現実と超現実の境界をあいまいにして、オウム真理教のように、大衆文化の産物である国産アニメやコミック、SFXを現実変革のヴィジョンに取り入れるような例もあるのだ。

その意味で、マルチメディア社会の到来とともに、大衆文化研究は新しい局面を迎えているともいえるだろう。

よく知られているように、マルチメディア社会を見据えて六十二年ぶりに全面改正されたアメリカの九六年通信法は、青少年に対する暴力表現や性表現の規制を強く打ち出し、言論表現の自由との関連で、憲法問題になっている。

思うに、クリントン大統領がこの点に強く固執する背景には、映画化されアカデミー賞を受賞して話題を呼んだトマス・ハリスの傑作『羊たちの沈黙』をはじめとする異常者による連続殺人ものの流行に象徴されるように、凶悪な異常殺人が多発しているというどうにもならないアメリカ社会の厳しい現実があるように思う。

その意味で、アメリカの大衆文化の中で大きな位置を占める現代ミステリーは、好景気を謳歌する現代アメリカの暗部を見事に浮き彫りにしているといってもいいのである。

怪盗アルセーヌ・ルパンの生みの親であるモーリス・ルブランやパイプをくゆらす渋い中年の名探偵メグレ警視を作り出したジョルジュ・シムノンなどの魅力を語りながら、パリのミステリー図書館訪問記を書くつもりが、知性と教養豊かな本誌読者を意識してつい堅くなってしまった。

鶴見俊輔は、『限界芸術論』で、普通芸術とよばれている作品を純粋芸術と呼び換え、この純粋芸術にくらべると俗悪なもの、非芸術的なもの、ニセモノ芸術と考えられている作品を大衆芸術（Popular Art）、両者よりもさらに広大な領域を芸術と生活との境界線とする作品を限界芸術（Marginal Art）と呼んだ。

残念ながら、マルチメディア社会ではこの俗悪な非芸術の大衆芸術がさらに一層拡大深化するものと予想される。

しかし、すでに見たように、いい悪いは別として、欧米では大学講座や図書館の整備によってそういう大衆文化を新しい研究領域として受け入れようとしており、学問的にもいわゆるカルチュラル・スタディーズ派などによる新しい試みがすでに始まっているのである。

その点、日本の状況は文学研究的立場に限って見ても、かなり立ち遅れているように見受けられる。

欧米では大衆文化への取り組み面で、大学も大学出版局も、日本とかなり違っているという現状を拙稿で少しでも伝えることができたら幸いである。

（専修大学文学部助教授）

第15回日韓大学出版部合同セミナー

大学出版人としての人間的共感を礎に

笹岡 五郎

一〇月二七日、山下正幹事長を団長にした私たち訪韓団一八名は宿にしたソウル市内のロイヤルホテルから、セミナー会場の江原道雪岳教育文化会館まで移動した。その道のりは長かった。

美しい全山紅葉を窓から見るバスの旅は、行楽日和の日曜のためか、しばしば渋滞にとめられた。殆んど牛歩のときもあった。尽きせぬ秋の山と、十六方に雲の影さえない碧落。ついには倦怠まで覚えるほどで、結局、目的地までは八時間近くかかってしまった。訪韓団に初参加の私にとって、この旅のもつ意味が何であるかぼんやり思い巡らすには、十分すぎる時間があった。協会活動の経験もまだ日浅く、一度は辞退しかけた本レポートだが、そういう自分なりに考え・見たことをここにまとめてみる。

私たちは前日午前一〇時に朝霧に湿る成田を発ち、二時間半のちにはソウル金浦空港で、大陸の乾いた涼気に吹かれた。ここでは建国大学出版部課長朱弘均さんの出迎えをうけた。朱さんはこの三月まで韓国大学出版部協会事務局長を務め、昨年の喜連川セミナーに参加された方である。市内に向かう車中で、終始微笑を絶やさず、これからも韓日の協会友好と交流のために力を惜しまないと話された。

それからソウル教保文庫に着き、初日の大きな目的である第1回日韓大学出版部協会共同図書展のレセプションに参加をした。この図書展開催の意味合いは、懸案であった実務レベルでの結実として大きく、翌夕のセミナー開会式の場にも高揚的な気分として引き継がれたように思う。

さてバスの長旅だが、再びソウルに帰着するまでずっと、ソウル大学出版部課長李圭一さん（協会事務局長）と韓国外国語大学出版部課長張庚泰さんの丁寧なガイドとお世話を受け、若い学生通訳黄圭玄さんの気配りも身に沁みた。やっと着いた教育文化会館も、ここはおもに教育者とその家族が利用する施設だそうで、私たちに割り当てられた部屋はオンドル式の床と簡易な炊事用具が備わった家族的なものだった。こうした韓国側の全般を通した配慮のお陰で、思ったよりも皆リラックスできていた。

午後六時半の夕食会も兼ねた開会式で、韓国大学出版部協会金容徳会長（ソウル大学出版部長）から挨拶があり、

第1回日韓大学出版部協会共同図書展

鎌田靖彦

一九九六年一〇月二六日（土）から一一月二日（土）まで八日間の会期で韓国・ソウル市の教保文庫で開催された。

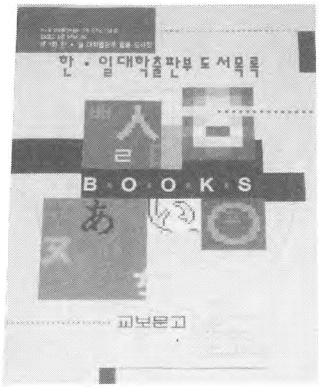
開会式は午後二時から始まり、韓国・大学出版部協会金容徳会長、金相培常務理事、徐正洙氏、朴賢哉氏、日本・大学出版部協会からは山下正幹事長、小川哲二・中陣隆夫訪韓団副団長の三名、教保文庫から柳建社長、兪炳夏常務等が出席し、テープカットが行なわれた。

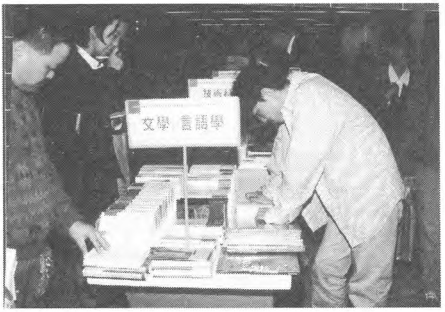
ついで、開会レセプションが教保文庫一階の喫茶ルームで開かれた。金浦空港からソウル市への途中で渋滞に巻き込まれ到着が遅れた日本側訪韓団計一八名と翌二七日からの第15回日韓大学出版部合同セミナーにオブザーバー参加する中国大学出版社協会の代表張暁秦（北京大学出版社）、李叔紅（清華大学出版社）の二名、韓国大学出版部協会・教保文庫の関係者も含め、約五〇名が参加した。

レセプションは韓国・大学出版部協会事務局長李圭一氏（ソウル大学校出版部）の司会で進行し、まず、教保文庫の金成龍理事から、五月以降開会に至るまでの準備経過が報告された。金容徳会長、山下正幹事長、李叔紅の三氏がそれぞれの大学出版部協会を代表して挨拶に立ち、こもごも日韓中三国の協会交流強化と三国の読者へ専門・研究書を普及させる意義、また今回開催に多大の尽力をいただいた教保文庫への感謝の意が述べられた。続いて、教保文庫の柳建社長が「教保文庫の創立一五周年に当たる記念すべき年に、文化的意義の高い専門・研究書の共同図書展を開催できた」と喜びを語り、日韓中三国の協会代表に記念の牌を贈られた。

共同図書展会場は、千坪をはるかに超える韓国最大の書

韓国の出版業界から図書展に贈られた花籠





右上　共同図書展　展示コーナー
右下　共同図書展　案内板
左上　図書展会場で配布された「展示図書目録」

店・教保文庫の中央通路に特設され、過去二年間の新刊書を中心に、日本側二二出版部六〇〇店一二〇〇冊、韓国側二七出版部七四〇店二千余冊の合計四九出版部一三四〇余点、三四〇〇余冊の図書が日韓それぞれの国別に分けられ、各ジャンル別に整然と展示販売された。多くの読者が興味深そうに展示図書を手に取り、中には熱心にメモを取りながら頁を操る学生の姿も印象に残った。会場には、この共同図書展のために特別に作成された展示図書目録や日・韓各出版部の個別目録も豊富に用意され、来場者が自由に持ち帰れるよう工夫されていた。また、ポスターや中立ちの表示板、会場入口には関係各方面から贈られた花篭なども華やかに飾られ、韓国・大学出版部協会と教保文庫の熱意と意気込みがヒシヒシと感じられた。

翌二七日朝刊では、韓国で最大部数を誇る『朝鮮日報』に韓国・大学出版部協会の全面広告が掲載され、あわせて崔洪烈記者の開会式と展示内容・会期を知らせる詳細な紹介記事が写真とともに掲載された。また、同日付けの『東亜日報』にも金次洙記者の署名記事で、教保文庫のこの共同図書展と二七日から二九日にかけて韓国随一の景勝地・雪岳山にて第15回日韓大学出版部合同セミナーが開催される旨の記事が、やはり写真入りで掲載されていた。その他、『中央日報』等各新聞も取材につめかけていた。

なお、その後一〇月三〇日にソウル大学校出版部にて日・韓・中三国代表者会議が開かれ、次年度以降のセミナーと

共同図書展　レセプション

共同図書展について話し合いが持たれた。席上韓国・大学出版部協会金容徳会長から「一九九八年は北京大学が創立百周年を迎えることでもあり、これにあわせてセミナーと図書展の開催を考えられないだろうか」との提案があり、中国側も「来年、日本で開催される第16回日韓大学出版部合同セミナーには正規メンバーとして参加し、九八年のセミナーと共同図書展の開催の具体化について検討したい」と発言があった。

日本・韓国・中国の東アジア三カ国大学出版部協会の相互理解と交流の強化は、ソウルで開催された今回の共同図書展を契機に大きな前進を遂げたと言えよう。

最後になりましたが、この図書展の実現に実務担当として重責を担った朱弘均（建国大学校出版部出版課長）、李圭一（ソウル大学校出版部出版課長）、張庚泰（韓国外国語大学校出版部出版課長）、教保文庫の金成龍理事、朴勝圭次長、金儀謙課長、トーハン海外事業部の田中海南・小野三吉・窪田泉・福本典孝の各氏、また訪韓団のいろいろ面倒な要望を適切に通訳して下さった韓国外国語大学校日本語科の黄圭玄さん、いちいちお名前をあげませんがたいへん大勢の皆様にお世話になりましたこと、感謝とともに御礼申し上げます。……カムサハムニダ。

（第15回日韓合同セミナー訪韓団員　法政大学出版局）

出版社のインターネット利用状況

植村八潮

昨年より、テレビや新聞でインターネットの文字を見ない日はない。ネットワーク社会の到来がビジネスや社会に及ぼす影響は大きく、出版界も例外ではないといわれる。文字組版の仕組みを変えたのが「DTP」、CD-ROMのような新しい本の形を目指したのが「電子本」とすると、「インターネット出版」は本のあり方と流通の仕組みをまるごと変えることになる。過大な期待や爆発的なブームを前にした当惑の声が聞こえてくる。

ではそのインターネットは現在、出版社でどのように利用され、どのような可能性を持つと考えられているのか。ブームに翻弄されず、冷静に学術専門出版の将来を考えるためには、その実態を把握する必要がある。大学出版部協会編集部会では昨年九月、すでにインターネット上にホームページを開設している八〇社を含む主要出版社一六六社を対象に、利用状況等についてのアンケートを実施した。内容は、ホームページの内容、効果、開発、運営、将来像など、一七項目の設問を設けた。有効回答数は九四社（回答率五七%）である。

まずインターネット利用について、回答のあった九四社の七割にあたる六七社が現在「利用している」と答えている。インターネットの利用率は、出版界のホームページ開設率に比べ高いことがわかる。ただその利用法の多くはホームページの閲覧で、次にパソコン通信でもできる電子メールが続いており、積極的な利用というより様子見といった感がある。なお、電子メールについては、著者との原稿のやり取りや連絡など編集で利用している場合が多く、編集のツールとして定着してきた感がある。

また、現在インターネットを「利用している」、または「検討中」と答えた七六社のうち、インターネットを利用しての流通について、「すでに行っている」、または「考えている」と答えたのは四五社となっている。

インターネット上のホームページ開設については、「すでに公開している」のは四八社（六三%）、「公開予定」が一一社（一四%）、「将来的には用意したい」が一五社（二〇%）。また、ホームページ公開の目的やそれに期待するものについては、「自社刊行物の広告宣伝」や「自社のPR」のためを挙げたところが最も多く、さらにその効果について「効果あり」と答えたのは回答した五三社中一五社。

しかし、「効果なし」としたのもわずか二社で、「わからない」（一五社）、もしくは「短期的な効果は期待していない」（二一社）との回答が多く、出版社の多くが事業化にはまだ遠いと考えているようである。公開目的について自社のPRや広告宣伝と捉えているところが多いのは、むしろノウハウの蓄積と割り切っているためともいえる。ちなみに「効果あり」と答えた理由としては、多数のアクセスと認知度の高まりを挙げたところが多い。

公開しているホームページの内容は、新刊案内、図書目録（既刊図書）がトップ項目で、以下、リンクページ、会社案内、オンラインショッピングと続いている。

そのホームページの開発と運営については、独自にサーバーを持っている出版社が五八社中二三社（四〇%）。ホームページの更新頻度は月一回が最も多い。ホームページの開発費では、社の規模に合わせゼロから一億円までと幅広い回答が寄せられていることから、出版社の体力に合わせた投資ができるのがインターネットともいえる。運営については社員のボランティアも多く見られることから、編集者や技術担当者の個人レベルの関心で進んでいるのが出版界の平均的なインターネット利用であるといえる。

一方、インターネット普及の問題点としては、「通信料が高い」と答えたところが最も多く、次いで「マルチメディア著作権の確立」「セキュリティ」が続いている。さらに将来のインターネット利用による出版物の変化については、「流通販売に変化がある」との回答が最も多いものの、「大勢に影響ない」と考えているところも意外に多い。

寄せられたコメントからは、インターネットに対する出版界の関心が高いことがうかがえる一方、出版に及ぼす影響について期待と不安が大きいことを感じる。

興味深いコメントとして「紀要や少部数の出版物がインターネットに向かう」とした回答が複数あった。また「特に学術書がインターネットと競合する」とした上で、「最新成果がリアルタイムなメディアで発表されるようになり、歴史的資料もすべて印刷できないなら電子的に公開された方が研究に資する」等から「学術出版は古典的な業績集のメディアに成り下がってしまうかもしれない」という指摘もあった。悲観的な極論とは片づけられない。理工系のある学会では、インターネットを利用した論文発表の準備に入る一方、収益の多くを支えている論文誌の講読率低下予測に対し、具体策が見つからないままであるという。

今後のインターネットと出版の関わりについて、あえて予想すると、①短期的にホームページによる広告の出現、②中期的に集金方法の確立による直販比率の増加と流通への変化、③長期的にデジタル著作権とその課金方法の確立によるネットワーク出版の登場、といったところか。

編集部会としては、学術専門出版とインターネットの関わりについて、今後も機会を設けながら研究していく予定である。

（東京電機大学出版局編集課）

歩く・見る・聞く
知のネットワーク 6

収集することへの欲望

東京都写真美術館を訪ねて

写真を撮るということは、写真に撮られるものを自分のものにすることだ（スーザン・ソンタグ『写真論』）――などと考えながら秋のある一日、恵比寿駅に降り立った。

「恵比寿ガーデンプレイス」、その一角に「東京都写真美術館」はあった。駅から「スカイウォーク」と呼ばれる動く歩道に蜿蜒と運ばれて、ホテル、レストラン、デパート、マンションなどが集まるこの複合施設に到着する。よく計画され、洗練された無機的な建物群の隙間をビル風が疾走する。

地下一階、地上四階建ての細長い灰色の箱は、ガーデンプレイスの隅の山手線沿いに寝そべっていた。地下一階は映像展示室で、ビデオやCGなどの動画だけでなく、古代の洞窟画から、現代の最先端まで、映像分野の広がりを紹介する。一階は一九〇名を収容するホール。二階は企画展示室、年間に約五本、独自の視点で構成した企画展を行っている。三階は常設展示室、収蔵する作品を展示。四階には図書閲覧室があり、写真・映像に関する書籍、雑誌を閲覧させてくれる。このほか、アトリエと呼ばれる部屋が二つあり、様々なワークショップを催している。また、二、三、四階のフロアには、コンピューターの端末が置かれ、収蔵品の検索が容易にできるようになっている。

地下一階の学習室で開かれていたワークショップ「拡大と縮小」が興味を引いた。「人は見えるものを記録し、見えないものを見えるようにしてきた」とし、望遠鏡、顕微鏡の発達の歴史を跡づけ、記録媒体としての写真の登場と高速度撮影、フラッシュなどの技術による奇跡的な映像を紹介している。「ミルクの中に落としたクランベリージュース」は牛乳が王冠のように盛り上がる瞬間を捉え、レナート・ニルソンは「三か月目の胎児」の祈るような姿をプリントしてみせる。そして、三一〇万個のトランジスタを埋め込んだインテルの集積回路が展示される。

見えないものは見えるようにして、見えるものはその極小にまで追い込んで収集する。わたしたちはパネルの前で

コンピューター端末での収蔵作品の検索

たたずみ、ちょっと異様な感動を覚える。それは圧倒的なテクニックの陰に見え隠れする「見たい、撮りたい」という欲望の凄まじさによるもののようだ。写真に撮られたものは事実である。なぜなら、写真はそこにあるもの以外、撮ることができないのだから。驚異的映像は事実によって保証されている。わたしたちは疑うことができず、ただ驚くしかないのだ。写真家は欲望のままにシャッターを切り、ハイテクノロジーは見ることの限界に向かって突き進み、驚異が残される。

ワークショップ「拡大と縮小」は写真の可能性の一つの方向を明確に示してくれる、意図のはっきりした好企画である。九七年の三月末まで催されているので、足をお運びいただきたい。

さて、書籍編集者としてのまとめに入らなければならない行数に至ったようだ。しかし、本と写真について語った文献は山のようにあるし、なにも日常業務に引きつけて、どこそこを見学するというのも変なので、そういうまとめ方をするつもりはない。ただ、「本が世界」なら写真はなんなのだろうと、ふと思った。わたしたちが手にする書籍は、すでに写真に撮られた世界ではないか。写真製版という行程をほとんどの書籍が経てきているし、写植はまさに文字どおり写真に撮られた文字である。書籍が木版で刷られたころ、本の世界は絵をほしがり、版画を取り込んだ、活版で組まれた時、亜鉛を腐食させて映像を刷り込んだ（『ヴィジュアル・コミュニケーションの歴史』晶文社、参照）。しかしやがて、レンズによって文字も絵も画像として一緒に取り込まれてしまうことになった。書籍はもはや写真と切っても切れない間柄になったのである。

写真美術館の展示を眺め、書籍に思いを馳せるのもなかなかいいものです。

（早稲田大学出版部・寺山浩司）

東京都写真美術館入口（実は裏口）

東京都写真美術館

〒153 目黒区三田1-13-3
☎03-3280-0031
休館日／毎週月曜日、年末年始
恵比寿駅東口より徒歩８分

大学出版部ニュース

第15回「編集者の集い」にて．矢口博之氏（東京電機大学講師）

▼第15回「編集者の集い」

編集部会の主催による第15回編集者の集い〈学術専門出版とインターネット〉が、10月11日（金）、東京電機大学理工学部（埼玉県鳩山町）で開催された。

植村八潮氏による「出版社のインターネット利用状況」報告（本誌17～18頁に要旨）をかわきりに、矢口博之氏による「インターネット入門」、望月厚志氏の「出版社のホームページ探訪」が続いた。さらに松本功氏が「学術出版とインターネット」について、松島周作氏は「トーハンのインターネットへの取り組み」について報告を行なった。最後は発表者全員にフロアを交えた活発な質疑応答によって幕を閉じた。

三時間半を超える長時間にもかかわらず、協会外部を含む六十名余の参加者は席を立つこともなく、インターネットへの関心の高さがうかがわれた。

▼第15回「日韓大学出版部合同セミナー」

▼第1回「日韓大学出版部協会共同図書展」

前号で既報の通り、第15回「日韓大学出版部合同セミナー」（10月27日～29日、韓国江原道・雪岳教育文化会館）および第1回「日韓大学出版部共同図書展」（10月26日～11月2日、ソウル市・教保文庫）が開催され、盛会のうちに終了した。セミナーには中国大学出版社協会もオブザーバーとして参加し、初の三国合同セミナーとなった（本誌11～16頁に記事）。

北海道大学図書刊行会

▼林田清明著『《法と経済学》の法理論』（A5判・五五六二円）《法と経済学》は一九七〇年代初めから開拓が進められてきた新たな法理論のひとつであり、経済学の理論的成果を法学の領域に拡張し、市場メカニズムのもつ独特の創造的な動態に基づき法を把握しようとする野心的な試みである。本書はその全体像と方法をめぐる論点を、提唱者のひとりであるポズナーの理論を中心に詳細に検討した、わが国法学者として初めての本格的業績である。

▼坂井昭宏編著『安楽死か尊厳死か』（四六判・二八八四円）脳死・臓器移植問題とは対照的に、尊厳死・安楽死に対する関心は衰えることを知らない。本書は「尊厳死」を介護制度や終末期医療のあり方の改革という視角からのみならず、「公的制度は常に完全とはいいがたい」との観点から、その欠けた部分を補うのは個人の善意であり、相互の理解と協力であるとして、ボランティアという無償の行為、無償でなければできない何ものかの意義の再考を呼びかける。死生観は新たな人生観を要求するのである。

聖学院大学出版会

▼三十号でも簡単にふれたが、工藤英一著『単税太郎C・E・ガルスト』（二四〇〇円）が出る。ガルストは、明治十六年（一八八三年）来日した米国の宣教師で、プロテスタントのディサイプルス派から派遣された。本学院の前身の聖学院神学校は、このディサイプルス派によって設立されたものである。

ガルストは、横浜に上陸するや、直ちに日本語を学び、当時僻地であった日本海の秋田へ伝道に向かい、漸次南下してやがて東京に居を移した。ガルストはキリスト教のみならず、社会改革にも関心を示し、土地にのみ課税されるべきとした単税論を主張し単税太郎と呼ばれた。日本に骨を埋めた日本社会改革の草分け的な存在といえよう。

著者工藤英一氏は、明治学院大学教授で、一九八七年に逝去されたが、本書はガルストの直筆の手紙や資料を基に社会経済史の観点からまとめたもので、今まで殆ど世に知られることが少なかった人物に光をあてたものである。

なお東大名誉教授で本学全学教授をつとめられた隅谷三喜男氏の序文を付す。

慶應義塾大学出版会

（旧 慶應通信）

▼『川を渡る　コミュニティと障害における考え方の革命の創造』（デイヴィド・B・シュウォルツ著／冨安芳和・根ケ山公子訳　三五〇二円）障害者と健常者、福祉の専門家と一般市民が、コミュニティの中で共に生きる価値を再発見するために、最先端の実践的ビジョンを示す。広くケアの心を伝えた本であり、福祉関係者以外にも一読を薦めたい。

▼『Keio　UP選書　成熟時代の日米論争』（薬師寺泰蔵・添谷芳秀・吉野直行・田村次朗・田中俊郎著　二〇〇〇円）冷戦終結後に顕在化してきた、政治・経済分野の諸課題について、日米の識者が相関的、包括的に討議した慶應国際エグゼクティブ・プログラムの成果をもとに書き下ろされた。選書の一冊目。

▼『実学 日本の銀行』（黒田昌裕・玉置紀夫編　二四〇〇円）バブル経済崩壊後の金融責任の処理および国際化、金融自由化などの諸問題が山積するわが国銀行の実態および将来の問題点を、銀行の実務者六人が、大学生や若い社会人のために多くの資料を用いて具体的に解説する、新しい「銀行入門書」。

産能大学出版部

▼『ーマルチメディア時代に対応する21世紀企業の組織デザイン』（J・R・ガルブレイス他著／寺本義也監訳　二五〇〇円）

南カリフォルニア大学組織有効性研究所が一〇年以上かけて、マルチメディアの発展等により変化し続けている世界市場で、企業が競争優位を保つための組織をどのようにつくり管理するかについて、二一世紀に向けての新しい実用的なアプローチを示す。

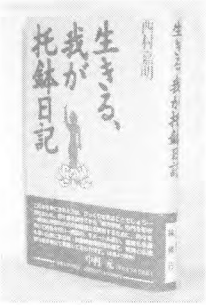
高度な従業員参加組織を作る方法、マネジャーの新しい役割、人的資源システムの構築、スタッフの分散化や仮想ネットワーク、未来型組織のチームワークへの新しいアプローチの方法など、新しいタイプの組織の創出、新しい組織形態の使用について詳説する。また、組織全体の業績最大化への情報・権限・知識・報酬の下方移動を融合させる方法を解説。

本書に登場する米国の先進企業では着々と組織のリデザインをすすめつつある。二一世紀を目前にして、わが国でも新たな組織デザインの構築を考えねばならないときがきている。

専修大学出版局

▼仏教思想家中村元が高齢をおして、この随筆集に寄せてくれた一文が、本書のすべてを物語っているだろう。曰く「この本を手にされた方は、びっくりされることでしょう…西村さんは四十歳を過ぎてから東方学院の門を叩き、努力して仏教思想を学ばれた方です。一方で実業家としての務めも果たしながら…町々を歩いて托鉢を行い…四国の千メートル近い、電気も水道もない山奥に単立寺を建て、少数の参禅者と寝食を共にして…実業と仏道修行を身を以て実践しておられます」

▼著者は大菩薩山瑞岳院で参禅修行し、自身の誓願に従って「一千日托鉢」を行っているのである。読者が驚こうと、正しく思想を学び、思想を思想にとどめず身体でそれを実践していく、このような本を大学出版部が出して悪い筈がない。



生きる、我が托鉢日記
西村嘉明著
四六判、226頁、定価1854円

玉川大学出版部

▼日本ペスタロッチー・フレーベル学会編『ペスタロッチー・フレーベル事典』（二〇六〇〇円）

教育の歴史をみると、学校教育を組織的・理論的に基礎づけ、出発させたのがペスタロッチーであり、教育は誕生と同時に始めることを説き、自らも幼児教育の実践に献身したのがフレーベルであった。本事典は、これら二人の偉大な教育思想をその人物と業績から八二〇のキーワードで解説。国内外の執筆陣一二九人。

▼阿部美哉著『現代宗教の反近代性―カルトと原理主義―』（三二九六円）

破壊的なカルトと宗教的原理主義の猖獗が現代社会の秩序を根底から揺るがしているが、これらの現象を報道するジャーナリズムはその表層をなぞるに留まっている。本書は、非西欧的、非合理主義的、宗教回帰的な「カルト」と「原理主義」の意味を掘り下げ、これらの現象のよって来る基盤を分析したものである。

玉川大学出版部の新刊情報は、ホームページにて随時最新データを案内中です。ぜひご覧下さい。
http://www.tamagawa.ac.jp/SISETU/UP

中央大学出版部

▼真田芳憲著『法学入門』（五一五〇円）

本書は主として将来専門的に法学を学ぶ学生のための道案内として、いわば法学徒の導きの《杖履》として書かれたものである。

本書は一般市民が日常生活上必要とする実際的な法的知識の提供を目的とするものではない。また、憲法・民法・刑法等の個別の法領域の各種の実定法上の知識の提供を目的とするものでもない。

本書は法や法秩序に対する根本的な考え方、法の構造原理、および法現象を通徹している基礎原理や原則を明示し、いわゆる法を「学問」することの《縁由》となることを目的とするものである。

▼田村五郎著『親子の裁判　ここ三十年』（三二九六円）

本書は、昭和四十年代以降の嫡出推定、養子縁組、特別養子、親族の扶養など、最高裁から家庭裁判所までの親子法をめぐる多彩な判例を取り上げており、これらの裁判事件を通して最近の法状況に迫り、その裁判の実際の進行過程を生き生きと描写した入門書である。

東海大学出版会

▼『かわらの小石の図鑑－日本列島の生い立ちを考える－』千葉とき子・斎藤靖二著（定価税込み二五七五円）

日本列島がどのように誕生し、現在の姿になったのか、その生い立ちには誰もが関心をもっていると思う。それを知るためには、日本列島をつくっている地質、岩石、鉱物、化石の知識、さらには地質時代におこった現象を推定する考え方も学ぶ必要がある。まず、野外で地層や岩石がでている崖、露頭の観察から始まるが、それにはかなりの準備が必要である。

そこで、本書はもっと身近なフィールドである『かわら』に出て、そこに転がる無数の小石の素性を調べることから、日本列島の生い立ちを探るカラー図鑑である。皆さんも近くのかわらの小石を調べてみませんか。

東京大学出版会

ロシア・アヴァンギャルドはスターリンの弾圧によって挫折したと物の本は書く。しかし「ロシア・アヴァンギャルドのなかにスターリニズムはあらかじめ備わっていた」という議論がいま主流になりつつある。各種の技法はスターリンが存分に活用したし、第一、生活と芸術の一致を叫んだテーゼは、社会主義リアリズムへと自ら転落していったのではなかったか？

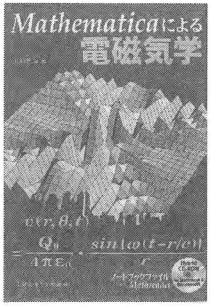
▼桑野隆『夢見る権利－ロシア・アヴァンギャルド再考－』（A5判・二九八七円）ではこの両義性を、単純に割り切らない。彼らは先の見えない「霧の中を歩んだのだ」。ならば彼らが望んだ未来、期待した自由を、その畏れや迷いとともにいまに取り戻すことが、あの運動の内実を再考することではないだろうか。「革命と言語」「宗教性」「全体主義」などのテーマを横断して論じた、東京大学教養学部での講義をもとにした書き下ろし。テーマ性の高い一連の駒場の授業から生れた「リベラルアーツ」シリーズの第三弾で、西谷修『夜の鼓動にふれる－戦争論講義』、小森陽一『出来事としての読むこと』の既刊がある。

東京電機大学出版局

▼電磁気学のような目に見えない物理現象を数式で扱うことは、初学者にとって難解である。それは正確な数式モデルが作りにくく解法を見つけるのに手間がかかることや、式が複雑になるとグラフィカルな表現が難しいことがあげられる。

しかし、コンピュータの高機能、低価格化に伴い数式処理ソフトが普及したことで、物理現象に基づく数学的モデルを作れば、容易にその全体像をグラフィックスで見ることができるようになった。

本書では、Mathematicaを用いて電磁気学を解説した。このソフトには微分積分をはじめ、特殊関数やベクトル解析、複素解析の演算機能が標準的に含まれており、電磁気学に現れる数式をすべて処理することができる。ファイルが付いているので、効果的な学習が可能である。



Mathematica による
電磁気学
川瀬宏海著
B５判，252頁，定価4120円

東京農業大学出版会

▼『清酒酵母の特性と生態』
竹田正久著、一五〇〇円

著者は、三年前に「酒づくりのはなし」を出しているが、その中でももちろん清酒酵母のはなしに触れており、本書は、清酒酵母に的を絞りさらに詳細に説明したものである。

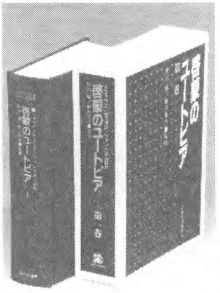
清酒醸造は日本固有のもので、米、米こうじ、水を原料とする酒づくりは外国にはない。生態系から見れば、酵母が住みつく清酒「もろみ」の環境は、日本だけしかない。外国人には清酒「もろみ」の環境特性が分からないばかりか、清酒酵母を分離する機会もないし、清酒酵母の特性を理解してもらうのは困難である。しかし、「日本の分類学者が理解しようとしないのは残念である」と著者は言う。

清酒酵母の特性を発見して以来、清酒酵母の学名は「サケ」であるべきと唱え続けてきた主張は、一貫している。

法政大学出版局

▼野沢 協・植田祐次 監修 ――――
『啓蒙のユートピア』第1巻（全Ⅲ巻）
A5判上製・九九〇頁／二万二六六〇円

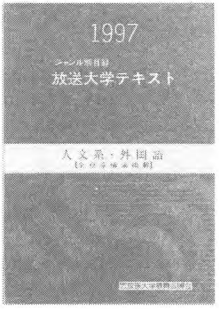
十七世紀末から大革命開始直前までの約一世紀間に発表された「社会構想のあるユートピア」作品十八点を選び全訳する全Ⅲ巻のシリーズ。フランス啓蒙期の想像力が生んだ「あらざる世界」は、社会批判であるとともに「社会の陰画」であり、「逆ユートピア」でもある。本巻は、フォワニ『南大陸ついに知られる』、ヴェラス『セヴァランブ物語』、ジルベール『カレジャヴァまたは合理人の島の物語』、ラオンタン男爵『著者と、良識があり旅行体験もある未開人との、興味ある対話』、ド・パト『ジャック・マッセの旅と冒険』、フォントネル『哲人共和国、またはアジャオ人物語』の六編。



放送大学教育振興会

▼放送大学教育振興会では、このほど、「図書目録」のニューフェイスとして、『1997 ジャンル別目録 放送大学テキスト』①人文系・外国語、②社会系・外国語、③自然系・外国語、の三分冊を作成した。

今回の「目録の特色」は、①対象を大学教師・図書館関係者にしぼったこと、②ジャンル別に分類して掲載したこと、③各テキストごとに「全章十五章分の章見出し」を掲載したこと、④どのジャンルにも共通に関心のある外国語テキストは三分冊とも掲載したこと、⑤ビデオ教材についても併載したこと、などである。「利用者の反響」は、「関係ある本、興味ある本がさがしやすくなった」など予想以上に好評のようである。



明星大学出版部

▼野口京子著『性格心理学－自己理解のために－』（定価一八五四円）

今日「性格」という概念も新しいとらえかたで研究されるようになってきた。人の性格に関する問題は奥深く、紫式部や清少納言の時代から宇宙へ人跡の及ぶ今日まで、ずっと関心をもたれてきた。

性格は生得的なもので変わらないという立場をとったとしても、その変わらない部分に、他の多くの性格の特性を加え補足していくうちに、それがまざりあってその人の全体的な性格が変わっていくとも考えられる。

本書は性格心理の概説書であるが、学説の紹介とともに、自らの性格を知り、その人のもつ才能や創造性を高めるということをめざし、精神的健康と性格の成長と変化に焦点をあてて執筆された。

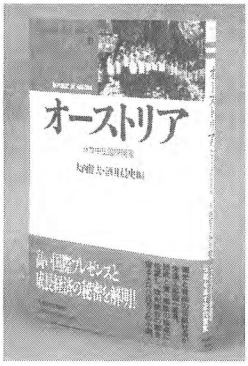
▼高島秀樹著『社会調査－社会学の科学的研究方法－』　本書は大学での講義に焦点を合わせ、社会調査を社会学の科学的研究の方法と位置づけ、その方法論としての基礎を明らかにするとともに、実践に役立つ社会調査の技法についても詳しく説明している。

早稲田大学出版部

▼『メルロ＝ポンティの政治哲学－政治の現象学－』（金田耕一、定価四五〇〇円、政治思想研究叢書7）　フッサール、ヘーゲル等の思想と交わした哲学的対話を中心に、政治と哲学の連関を読み解く。

▼『江戸の文苑と文章学』（杉本つとむ、定価八八〇〇円）　「文章学」という新たな構想に立脚して、本居宣長、荻生徂徠、井原西鶴を初めとする江戸期の文章の生態的研究を試みる。文章表現の目的を問う斬新な文章読本。

▼『オーストリア－永世中立国際国家－』（大西健夫・酒井晨史編、定価二八〇〇円、ワセダ・リブリ・ムンディ21）　先進工業国へ変身を遂げ、ヨーロッパ統合の鍵を握るオーストリア。国際社会での高い地位と成長経済の秘密を解明する。



名古屋大学出版会

▼湯浅信之訳『ジョン・ダン全詩集』（定価九七八五円）現代に甦る魂の修辞。恋愛詩から宗教詩まで、T・S・エリオットによって「思想を感覚的に把握する」と讃えられた希有な詩人の全詩業。

▼松永俊男著『ダーウィンの時代－科学と宗教－』（定価三九一四円）科学と宗教の闘争史観を排し、元来宗教と一体化していた科学が宗教から分離される過程をダーウィンの進化論に即して究明。

▼S・カースルズ他／関根政美・関根薫訳『国際移民の時代』（定価三一九六円）移民、難民、外国人労働者等、国際人口移動が引き起こす現代世界の最も困難な問題を総合的・体系的に考察し展望する。

▼石川文康著『カント　第三の思考－法廷モデルと無限判断－』（定価四九四四円）理性が理性的であることによって抱え込んでしまう矛盾や限界は乗り越えられるのか。理性批判のダイナミズムを析出。

▼堀田誠三著『ベッカリーアとイタリア啓蒙』（定価五八七一円）近代刑法学と死刑廃止論の先駆者として著名なベッカリーアを焦点に、イタリア啓蒙思想のヨーロッパにおける見取り図と特質を解明。

京都大学学術出版会

▼『昆虫個体群生態学の展開』久野英二編著／生物は同種内での競争、他種との補食・共生・寄生等、他の生物との関わり合いの中で生きている。その生態を定量的に捉え、存続や絶滅の原理を、興味深い昆虫たちの姿を通して示す。▼『近世の市場経済と地域差―物価史からの接近―』草野正裕著／近年の物価史研究の上に、地域差の観点をすえることで、各市場の差と相互依存の関係、またその変動のプロセスを、論理的・具体的に求める。▼『地域研究の問題と方法―社会文化生態力学の試み―』立本成文著／地域研究は単なる学際的研究ではなく、諸科学の再編成を促す活性剤となりうるものである。地球世界を生かす生態理論としての「地域研究」のあり方を体系的に示す。▼『調査報告・広隆寺上宮王院聖徳太子像』伊東史朗編著／平成六年、太子像内部銘文とともに、太子が直にふれた品々が発見された。太子信仰の実際と、高度な造像技術を示す貴重な史料を美しい写真とともに紹介、考察する。

大阪経済法科大学出版部

▼武者小路公秀編『アジアの共生をめざして』〈アジア研究所研究叢書5〉敗戦後五〇年たった今でも、ある種の日本人にとっては「侵略の事実」は受け入れ難いことのようだ。時折発せられるそれらのノイズは、かつての被侵略国の人々に不信感を植え付ける。本書は、日・中・朝・韓の学者が一堂に北京で会し、日本と東アジア諸国戦後五〇年の関係についての国際シンポジウムの成果をもとにまとめたもの。▼村川行弘編『五〇〇〇年前の東アジア』〈アジア研究所研究叢書6〉これも国際シンポジウムがベースであるが、五千年前の東アジアに焦点をあて、中国の黄河・揚子江流域、朝鮮大同江流域、韓国漢江・洛東江流域、ロシア極東地域、日本の縄文前期・中期を代表する三内丸山遺跡等、各地域の文明の源流と発展形態そして文化交流の原点を検証したもの。▼相澤秀一著『経済言論』言論の自由が圧迫されつつあった昭和十年代においてもなお可能な限りの批判精神に横溢した『黎明期の市民経済学』『経済学説史』を上梓したことで高い評価を得た著者の遺稿集。

関西大学出版部

▼戒田郁夫著『欧米財政学・経済学導入史上の忘れられた人々』（定価四一二〇円）本書の第Ⅰ部では欧米財政学の受容に貢献した五人の略歴と業績の評価を、第Ⅱ部では我が国経済学教育史上のマーセット夫人の役割とマウンジーの『薩摩反乱記』の母国での評価を論じる。第Ⅲ部は関西大学と欧米経済学の関わりを記念行事や戸田省三ら二人のOBの生涯等を通して考察する。▼伴義孝著『体育とは何か―大学改革論議からの発信―』（定価四六三五円）身体と精神は身体運動を媒介にしてのみ一元的働きを具現する。人間は二本足の動物でもある。本書はこの二大命題をもとに、人類の進化軸と現在という生活軸の観点から、現代社会における体育の本質を問い直して人間疎外問題にまで迫る。

九州大学出版会

▼W・メッツガー著／大村敏輔訳『**心理学**』B5判五五〇頁・一四四二〇円。―実験導入後の心理学における基本仮定の発展。今世紀心理学を象徴するゲシュタルト心理学の理論的集大成の邦訳。わが国において早くからその翻訳出版が待望されていたものであるが、その難解さのために今日までその目的は果たされていなかった。訳者は一九七三年から二年間著者メッツガーのもとに留学し、本著について直々の指導を受けている。本書の刊行はわが国の心理学界ならびに隣接諸科学に対して大いなる貢献を果たすものである。▼松下志朗著『**石高制と九州の藩財政**』A5判五八〇頁・一〇三〇〇円。日本生命財団出版助成図書。兵農分離、鎖国制と並んで日本近世社会を特徴づける石高制を、検地、藩財政、年貢徴収の具体相と係らせた実証研究により、石高制の通説的理解に厳しく再考を迫り、研究に新たな地平をひらく。最後に、福岡藩関係の未公刊の史料二点を翻刻した。▼〈経済工学シリーズ・第2期〉第三巻古川哲也著『**FortranとCによる経済分析**』A5判二二〇頁・三〇九〇円。

流通経済大学出版会

流通経済大学では本年四月に「流通情報学部・流通情報学科」を新たに開校した。これで二大学院研究科（いずれも博士課程）と三学部五学科体制となり、学生数も約六千名を擁することになった。

新学部では、『流通の近代化・合理化』という社会のニーズに応える新しい学問分野で、コンピュータ・通信ネットワークのハードとソフトの高度な技術、流通の理論と実務、そして国際人としての教養を養い、流通情報に関するエキスパートの育成をめざす。』とその設立の趣旨をうたいあげている。

小会でも新学部開校を記念し、『流通情報学部開校記念論文集』の製作を進めているところである。発行は平成九年三月を予定している。収録論文は、『一般化線形モデルにおける推定方程式と擬似尤度（ゆう）』、『ネットワークデザイン問題の近似解法』、『情報教育における曖昧評価』、『テクノストレスに関する研究』、『コンビニエンス・ストア立地の経済分析・独占的均衡と社会最適』など二十一篇である。

大阪大学出版会

いま、スペース・コラボレーション・システムを通じて大学間の授業も活発である。地方にも中央の情報がリアルタイムで流れている。かつての学問の伝播の仕方とはまさに様変わりしている。

▼梅溪　昇『**緒方洪庵と適塾**』（定価一三三九円）には門下生六三六人がその後どのように活動したかが各県ごとにまとめられている。洪庵から塾生へ、塾生から地元へ帰ってその門弟へと次々に知識が広がっていく様子が看取できる。洪庵は手紙という生涯教育で彼らを支えた。

ちなみに「情報」は出典はつまびらかでないが福澤諭吉の訳語という。

▼大阪大学基礎工学部編『**自然のしくみと人間の知恵**―明日をひらくエンジニアリングサイエンス』（定価二九八七円）

大学でなされている先端科学の成果をわかりやすいかたちで市民に向けて公開するフロンティアシリーズの第三弾。科学と技術の融合による科学技術の根本的な開発をめざす研究者が、自らのオリジナルな成果と体験をもとに最近の発展を平易に解説し、理工学研究の面白さと意義をとくに若い人びとに語りかける。

新刊案内 '96・10～'96・12

（表示価格は税込みです）

■北海道大学図書刊行会
ふだん着の人権　北海道教育大学公開講座委員会編　二〇六〇円
安楽死か尊厳死か　坂井昭宏編著　二八八四円
進化生物学における比較法　ハーヴェイ、パーゲル著／粕谷英一訳　七七二五円
親子関係の進化生態学－節足動物の社会－　齋藤　裕編著　三〇九〇円
William Smith Clark-A Yankee in Hokkaido　Jhon M. Maki　四三二六円

■聖学院大学出版会
単税太郎C・E・ガルスト　－明治期社会運動の先駆者－　工藤　英一　二四〇〇円

■慶應義塾大学出版会（旧　慶應通信）
成熟時代の日米論争　薬師寺泰蔵・添谷芳秀・吉野直行・田村次朗・田中俊郎　二〇〇〇円
外交・領事関係〈日本の国際法事例研究(4)〉　国際法事例研究会　四六三五円
川を渡る－コミュニティと障害における考え方の革命の創造－　D・B・シュウォルツ／冨安芳和・根ケ山公子訳　三五〇二円
現代日本の公共政策－環境・社会資本・高齢化－　鈴木　守　二〇六〇円
資本蓄積論－歴史の中の経済－　寺出　道雄　二〇六〇円

■産能大学出版部
実践目標管理　産能大学経営開発研究本部編　二三〇〇円
21世紀企業の組織デザイン　J・ガルブレイス他／寺本義也監訳　二五〇〇円
創業の達人　ダイヤモンド・タイプ編集部編　一六〇〇円
セブン-イレブンの革命　村上　豊道　一五〇〇円
速修・インターネット英語　橋本　貞雄　一六〇〇円
本田宗一郎「美しき晩年」　辻　均　一六〇〇円
EQ型人間が成功する　青木　匡光　一五〇〇円
成功する心の態度　松原　忠康　一五〇〇円
富を築く100万ドルのアイデア　L・ロビンズ／藤本隆一訳　一五〇〇円
「中国北方」進出事情　水井正明・李為　一八〇〇円
新しいマーケティングがわかる本　川勝久・榎本宏　一六〇〇円
電子マーケティング　佐藤　元則　一八〇〇円
住宅産業のマーケティング戦略　三島俊介・檜山純一　一八〇〇円
フランチャイズ開業「成功の極意」　広報システム研究所　一六〇〇円

■専修大学出版局
生きる、我が托鉢日記　西村　嘉明　一八五四円

■玉川大学出版部
教育政策の課題　西田亀久夫　三〇九〇円
現代宗教の反近代性－カルトと原理主義－　阿部美哉　三二九六円

アメリカ高等教育の大変貌―一九六〇―一九八〇年―　C・カー／小原・高橋・加澤・今尾訳　五一五〇円
現代日本の専門学校―高等職業教育の意義と課題―　韓　民　三二九六円
大学の使命　オルテガ・イ・ガセット／井上正訳　二八八四円
日本の研究者養成　塚原修一・小林信一　六六九五円
ペスタロッチー・フレーベル事典　日本ペスタロッチー・フレーベル学会編　二〇六〇〇円

■中央大学出版部
国際経済法　M・ヘァデゲン／山内惟介他訳　四六三五円
行政過程の制度分析―戦後日本における福祉政策の展開―　武智　秀之　五一五〇円
アメリカ文学言語辞典　藤井健三編著　五一五〇円

■東海大学出版会
日本政治の実証分析―政治改革・行政改革の視点―　堀　要　二八八四円
THIS LVING OCEAN―海洋生物の世界―　益田　一　一二三六〇円
日本産海洋プランクトン検索図説　千原光雄・村野正昭編　四六三五〇円
アジア産蝶類生活史図鑑Ⅰ　五十嵐邁・福田晴夫　四三二六〇円
太陽系の起源と進化―地球誕生の謎を探る―　押手敬・青木斌訳　二八八四円
地球科学の発展と展望　藤原鎮男編著　二八八四円
バイオミネラリゼーション―生体鉱物の世界―　渡部　哲光　四三二六円
徒然草Ⅱ〈桃園文庫影印叢書13〉　蟹江秀明・鍛治光雄解題　二五七五〇円

■東京大学出版会
森を語る男〈熱帯林の世界3〉　加納　隆至　二二六六円
食の考古学〈UP選書274〉　佐原　真　一八五四円
判例教材　刑事訴訟法〔第2版〕　三井誠・井上正仁編　四五三二円
パクス・デモクラティア―冷戦後世界への原理―　B・ラセット／鴨武彦訳　三〇九〇円
プロテスタンティズムと資本主義―ウェーバー・テーゼの宗教史的批判―　椎名重明　六一八〇円
大都市の社会基盤整備　大阪市立大学経済研究所・松澤俊雄編　四三二六円
講座現代居住4　居住と法・政治・経済　早川和男・横田清編　三九一四円
太古の海の記憶―オストラコーダの自然史―　池谷仙之・阿部勝巳　三八一一円
宇宙科学入門　尾崎　洋二　三七〇八円
樞密院高等官履歴　第一巻　明治ノ一　国立公文書館所蔵　一四四二〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇81　国立国会図書館所蔵　一三三九〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇111・112　国立国会図書館所蔵　各一七五一〇円
大日本史料　第五編之十七　東京大学史料編纂所編　一二三六〇円
大日本史料　第十二編之十七　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
講座現代居住5　世界の居住運動　内田勝一・平山洋介編　三九一四円
吹矢と精霊〈熱帯林の世界4〉　口蔵　幸雄　二二六六円
カクレキリシタンの信仰世界　宮崎賢太郎　五〇四七円

歴史の文字―記載・活字・活版―〈東京大学コレクションⅢ〉　西野嘉章編　三二九六円
大学博物館　西野　嘉章　三〇九〇円
認知臨床心理学入門―認知行動アプローチの実践的理解のために―　W・ドライデン、R・レントゥル編／丹野義彦監訳　四一二〇円
絵巻物の建築を読む　小泉和子・玉井哲雄・黒田日出男編　四三二六円
建築意匠講義　香山　壽夫　五九七四円
清代禁書の研究　岡本さえ　二八八四〇円
紛争と世論　近世民衆の政治参加　平川　新　五六六五円
太平洋戦争とアジア外交　波多野澄雄　四五三二円
多変数函数論　西野　利雄　七〇〇四円
新版　超函数入門　金子　晃　六五九二円
樞密院高等官履歴　第二巻　明治ノ二　国立公文書館所蔵　一四四二〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇82　国立国会図書館所蔵　一三三九〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇113・114　国立国会図書館所蔵　各一七五一〇円
大日本史料　第五編之十八　東京大学史料編纂所編　一二三六〇円
大日本史料　第十二編之十八　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
森の食べ方〈熱帯林の世界5〉　内堀　基光　二二六六円
カウンセリングを学ぶ―理論・体験・実習―　佐治守夫・岡村達也・保坂亨　二八八四円
夢見る権利―ロシア・アヴァンギャルド再考―〈リベラルアーツ・シリーズ〉　桑野　隆　二九八七円
帝国のたそがれ―冷戦下のイギリスとアジア―　木畑　洋一　五一五〇円
近代中国の知識人と文明　佐藤　慎一　五三五六円
盧溝橋事件の研究　秦　郁彦　七〇〇四円
日本の職場と生産システム　中村　圭介　八七五五円
現代フランスの社会保障　藤井　良治　六一八〇円
物理学入門　大西　直樹　二二六六円
医薬品情報学　山崎幹夫・望月眞弓・武立啓子編　四三二六円
The Parallel Universe of English　佐藤良明・柴田元幸　一八五四円
哺乳類の生態学〈ナチュラルヒストリー・シリーズ〉　土肥昭夫・岩本俊孝・三浦慎悟・池田啓　三九一四円
樞密院高等官履歴　第三巻　大正ノ一　国立公文書館所蔵　一四四二〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇83　国立国会図書館所蔵　一三三九〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇115・116　国立国会図書館所蔵　各一七五一〇円
大日本史料　第五編之十九　東京大学史料編纂所編　一二三六〇円
大日本史料　第十二編之十九　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円

■東京電機大学出版局

コンピュータによるグラフィックス〈新・数学とコンピュータシリーズ9〉　片桐重延監修　一九五七円
パワーエレクトロニクスの基礎〈理工学講座〉　岸　敬二　三五〇二円
Mathematica による電磁気学　川瀬　宏海　四一二〇円
学生のための Windows 95　若山芳三郎　一八五四円
流体の力学計算法〈計算法シリーズ〉　森田　泰司　一八五四円
日本人の創造力　小山田了三　二六七八円
たのしくできるやさしいメカトロ工作　小峯　龍男　一八五四円

MATLABによる制御のためのシステム同定　足立　修一　二七八一円

■東京農業大学出版会

清酒酵母の特性と生態　竹田　正久　一五〇〇円

■法政大学出版局

精神と記号　F・ガタリ／杉村昌昭訳　二〇六〇円

イメージの哲学　F・ダゴニェ／水野浩二訳　四六三五円

ルクレティウスのテキストにおける物理学の誕生
―河川と乱流―　M・セール／豊田彰訳　三五〇二円

ホモセクシュアルとは　L・ベルサーニ／船倉正憲訳　二三六九円

中世のカリスマたち―八人の指導者の葛藤と選択―
N・F・キャンター／藤田永祐訳　二九八七円

絵画の見方―美的経験の認知発達―
M・J・パーソンズ／尾崎彰宏・加藤雅之訳　三二九六円

音楽と病―病歴に見る大作曲家の姿―
J・オシエー／菅野弘久訳　三五〇二円

現代資本主義とセイフティ・ネット―市場と非市場の関係性―
法政大学比較経済研究所／金子勝編　三七〇八円

幻想の起源
J・ラプランシュ、J・B・ポンタリス／福本修訳　一三三九円

中国戯曲集　黒川　欣映　二〇六〇円

異端カタリ派の哲学　R・ネッリ／柴田和雄訳　三二九六円

時間について　N・エリアス／井本晌二・青木誠之訳　二五七五円

ドイツ人論―文明化と暴力―
N・エリアス／青木隆嘉訳　六四八九円

力の場―思想史と文化批判のあいだ―
M・ジェイ／今井道夫・他訳　四三二六円

人種差別　A・メンミ／菊地昌実・白井成雄訳　二三六九円

イラストレーション
J・ヒリス・ミラー／尾崎彰宏・加藤雅之訳　三九一四円

俳優　J・デュヴィニョー／渡辺淳訳　三九一四円

枕〈ものと人間の文化史81〉　矢野　憲一　二四七二円

■放送大学教育振興会

■明星大学出版部

性格心理学―自己理解のために―　野口　京子　一八五四円

■早稲田大学出版部

江戸の文苑と文章学　杉本つとむ　八八〇〇円

地域社会の変貌―岩手県・田野畑村をめぐって―
J・ベイリー／長田攻一訳　四五〇〇円

ロシア民話の世界〔新装版〕　藤沼貴編著　三七〇八円

劇場―建築・文化史―〔新装版〕
S・ティドワース／白川宣力・石川敏男訳　四四二九円

平和研究　第二一号　特集・「持続可能な発展」と日本の選択
日本平和学会編　三四〇〇円

スポーツをめぐる契約の諸問題〈日本スポーツ法学会年報第3号〉
日本スポーツ法学会編　四五〇〇円

叢書　ワセダ・リブリ・ムンディ

21　オーストリア―永世中立国際国家―
大西健夫・酒井晨史編　二八〇〇円

早稲田大学理工総研シリーズ

8　市民参加の都市計画　伊藤　滋　二〇〇〇円

政治思想研究叢書

7　メルロ＝ポンティの政治哲学―政治の現象学―
金田　耕一　四五〇〇円

シリーズ社会経済史

5　イギリスのインフレーション
—テュダー・初期ステュアート期—
R・オウスウェイト／中野忠訳　一七〇〇円

6　ケインズとイギリスの経済政策
—政策形成に「ケインズ革命」はあったか？—
G・ピーデン／西沢保訳　一七〇〇円

シリーズ比較家族／比較家族史学会監修
7　戸籍と身分登録　利谷・鎌田・平松編　三八〇〇円

水野祐著作集　全10巻／第7回配本
第7巻　通論　日本古代史(I)　打磨時代篇　五〇〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書　洋学篇／第12回配本
第11巻　天文暦学書集　I　杉本つとむ編　三〇〇〇〇円

■名古屋大学出版会

ベッカリーアとイタリア啓蒙　堀田　誠三　五八七一円
カント　第三の思考—法廷モデルと無限判断—　石川　文康　四九四四円
ダーウィンの時代—科学と宗教—　松永　俊男　三九一四円
ジョン・ダン全詩集　湯浅信之訳　九七八五円
国際移民の時代　S・カースルズ他／関根政美他訳　三二九六円
絵画の黄昏—エドゥアール・マネ没後の闘争—　稲賀　繁美　四九四四円
フラーレンの化学と物理　篠原久典・齋藤弥八　五六六五円

■京都大学学術出版会

昆虫個体群生態学の展開　久野英二編著　五八〇〇円
地域研究の問題と方法—社会文化生態力学の試み—
〈地域研究叢書3〉　立本　成文　四〇〇〇円
調査報告・広隆寺上宮王院聖徳太子像　伊東史朗編著　六〇〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

欧米財政学・経済学導入史上の忘れられた人々　戒田　郁夫　四一二〇円
体育とは何か—大学改革論議からの発信—　伴　義孝　四六三五円

■九州大学出版会

二十一世紀における医学生および医学の使命　S・B・デイ／井口潔・小林迪夫監訳　一五〇〇円
FortranとCによる経済分析
〈経済工学シリーズ・第2期〉　古川　哲也　三〇九〇円
石高制と九州の藩財政　松下志朗　一〇三〇〇円
Membrane Proteins—Structure, Function and Expression Control—　濱崎直孝・三原勝芳編　一四四二〇円
Public Policy and Economic Analysis　細江守紀、E・ラスムセン編　一〇三〇〇円
心理学　W・メッツガー／大村敏輔訳　一四四二〇円
疾病から文明論へ　高橋　宏　一八五四円
漁場利用の生態　田和　正孝　七二一〇円

■流通経済大学出版会

緒方洪庵と適塾　梅溪　昇　一三三九円
福沢諭吉と写真屋の娘　中崎　昌雄　二〇六〇円
異文化の交流　柏木隆雄・山口修編　一八五四円
自然のしくみと人間の知恵　大阪大学基礎工学部編　二九八七円
—明日をひらくエンジニアリングサイエンス—

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目　北大構内 TEL. 011-747-2308　FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1—1 TEL. 048-725-9801　FAX. 048-725-0324
慶應義塾大学出版会（旧慶應通信）	〒108 東京都港区三田2—19—30 TEL. 03-3451-3584　FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101　FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4238　FAX. 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6—1—1 TEL. 0427-39-8935　FAX. 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742—1 TEL. 0426-74-2351　FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2—28—4 TEL. 03-5478-0891　FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7—3—1　東京大学構内 TEL. 03-3811-8814　FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2—2 TEL. 03-5280-3433　FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1—1—1 TEL. 03-5477-2562　FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2—14—1 TEL. 03-5228-6271　FAX. 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750　FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2—1—1 TEL. 0425-91-9979　FAX. 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1—103 TEL. 03-3203-1551　FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1　名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027　FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182　FAX. 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6—10 TEL. 0729-41-8211　FAX. 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3—3—35 TEL. 06-368-1121　FAX. 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7—1—146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515　FAX. 092-641-0172
流通経済大学出版会（準会員）	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001　FAX. 0297-64-0011
大阪大学出版会（準会員）	〒565 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614　FAX. 06-877-1614

大学出版（第32号）'97冬　平成9年1月10日発行　発行所／大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111（内）7956
頒布価格100円　〒共